

社人研ディスカッションペーパー
「2022 年生活と支え合いに関する調査世帯票のウェイトについての考え方と方法」
に対するコメント

2024 年 4 月
立教大学 三輪哲

本ディスカッションペーパーは、2022 年におこなわれた「生活と支え合いに関する調査」（以下、本調査）について世帯票のウェイト開発とその検証を扱った研究成果である。ウェイトをつくるまでの過程で、標本設計にかかわるベースウェイト、実査時の無回答に対応した無回答ウェイト、そして事後的に補正に資する事後層化ウェイトの 3 点を考慮し、それぞれの数学的整理と本調査における適用を解説する。そのうえで総合的に作成された最終ウェイトまで含め、さまざまなウェイトにより、世帯人員の平均値がいかにもとなつた国民生活基礎調査で得られたそれと近づくかあるいは遠ざかるかを検討する。本ディスカッションペーパーに対して、計量社会学の基礎研究、応用研究に携わる立場からコメントする。

1) 事後層化ウェイトが「かえって世帯人数の過大推計をもたらす」ことについて

目的変数（世帯人員）が事後層化の基準となっていることからすると不可解な印象がある。事後層化において都道府県単位の情報を用いたことか、令和 2 年度国勢調査の情報を層の作成で使用了ことか、あるいは「世帯人数不明」の世帯データの影響なのか、などさまざま考えうるが、可能であれば検討してもらいたい。

2) ベースウェイトの 1（地点）と 2（世帯）でのパフォーマンスの違いについて

今回の検証においては、前者は平均世帯人員数をより多く推計するように補正し、後者ではほぼ補正の効果は（平均世帯人員数でみる限り）みられなかった。単純に、基本属性の周辺分布を母集団へ近づける点ではどちらも変わらないはずだが、世帯人員数の平均値との関係ではそうではなかったわけである。これらが意味するところは何か、検討されたい。

3) 無回答の検討にかんする情報について

このたびのウェイト作成において、無回答ウェイトの役割は重要である。とりわけ、世帯人員数の補正にかんしては、無回答ウェイトが大きな貢献をしていることは印象深い。しかしながら、本文では、無回答の検討の情報がやや少ないように感じられた。確かにロジスティック回帰分析による回答/無回答の判別はなされているけれど、そもそも無回答の割合はいかほどか、それが地理的にどれくらいばらつきがあるのか、などはわからない。後の分析や考察を活かすためにも、無回答の基本情報をより多く掲載するとよいのではないだろうか。

4) 世帯人員数以外に、他の指標の補正も検討してはどうか

おそらくは世帯人員数は（他調査より）「正解」の値が得られているので、それをターゲットとして補正の良し悪しを検討するのは手堅いアプローチではある。しかしながら、本調査のデータを用いるユーザーは、「正解」がわからない変数について、提案されたウェイトによる補正が有用に関心があるのではないだろうか。だとするならば、本調査の他の変数のうち、別の資料で「正解」とは言えずともいくらかそれに近い値が得られているものを選択して、補正の可能性を検討するのは一考である。

5) 同調査の他の時点のものへと適用して、安定性をみてはどうか

本調査は、5年に一度の継続調査としておこなわれているゆえ、過去のデータも比較可能であるはずである。このたびの方法を、過去データへと適用して、どのような補正の結果が得られるかは興味深い。補正が的確におこなうことができ、なおかつそれが時点間で安定的であれば、ユーザーのみならず、一次調査者側にとっても望ましいといえる。

6) 語句の用法や表記など、修正の検討点

いくつか、細かい点で修正の必要があると思われる。

- ・社会調査は～ は、標本調査として限定すべき
- ・イントロで、回収率低下とウェイトの必要性の議論がつけられているが、そこに「回収率低下に伴うサンプルの偏り」を入れないと話が通じがたくなる
- ・調査対象者という表記よりも、対象世帯としたほうがよいのでは
- ・ポスティングは回収率低下の「原因」ではないはずで、表現の再考を求めたい

さまざまコメントしたが、作成の論理に納得がいき、補正がさまざまなものに使えるウェイトが重要であることには、異論がない。統計調査に伴うウェイトの基礎研究は、着実に積み上げられていってもらいたいと願う。

以上